

市が進める「リサーチ&ビジネスパーク構想」

帯広市は、本年度から新しい産業づくりに向け、産学官が連携して新製品の研究開発から事業化までを一体的に進める「リサーチ&ビジネスパーク(R&B)構想」に取り組む。砂川敏文市長が選挙公約の柱として掲げたもので、地域活性化の起爆剤として期待されるが、成果を上げるにはしばらく時間がかかりそうだ。この構想をどう進めていくのか、市が描く中・長期的なイメージを紹介する。

(立木大造)

帯畜大核に 新産業創出

来年度以降 産学官で協議会

R&Bの展開は道内では北
大(札幌)、函館に次いで三
地域目。帯広では研究の蓄積
のある帯畜大を核に、十勝
管内の国立や道立の研究機
関、十勝産業振興センター、
企業に呼び掛け、研究開発や
事業化を進める考えた。来年
度以降、関係機関でつくるR
&B推進のための協議会を設
置。市は帯畜大周辺に施設
を用意して大学や企業が一緒
に研究できる環境を整える。
何を開発するのはまだ
白紙だが、市は畑作・酪農
の都市エリア産学官連携促進

度から三年間の計画で、同様
すでに十勝では二〇〇五年
と期待する。
に結び付けたい(市企画部)

機能性食品などイメージ

事業も行われているが、R&Bのメリットとして市企画部は「事前に策定した計画に沿って進める同事業より、幅広い分野で臨機応変に取り組んで、さまざまな国の助成、メニューが活用できる」としている。

道などが提唱して〇三年度からスタートした北大R&Bでは、最先端の研究を応用した医療機器などの実用化を目指す。道科学技術振興課は「プロシエクトを設定して、本年度から二年程度で成功事例を出していきたい」とする。

帯広でのR&B推進にあたっては、大勢の研究者を抱える施設に恵まれた北大R&Bを意識しすぎると無理が生じる。既存の産学クラスター研究会などとも連携しながら、まず帯広独自の方向性や手法を確立することが求められそう。